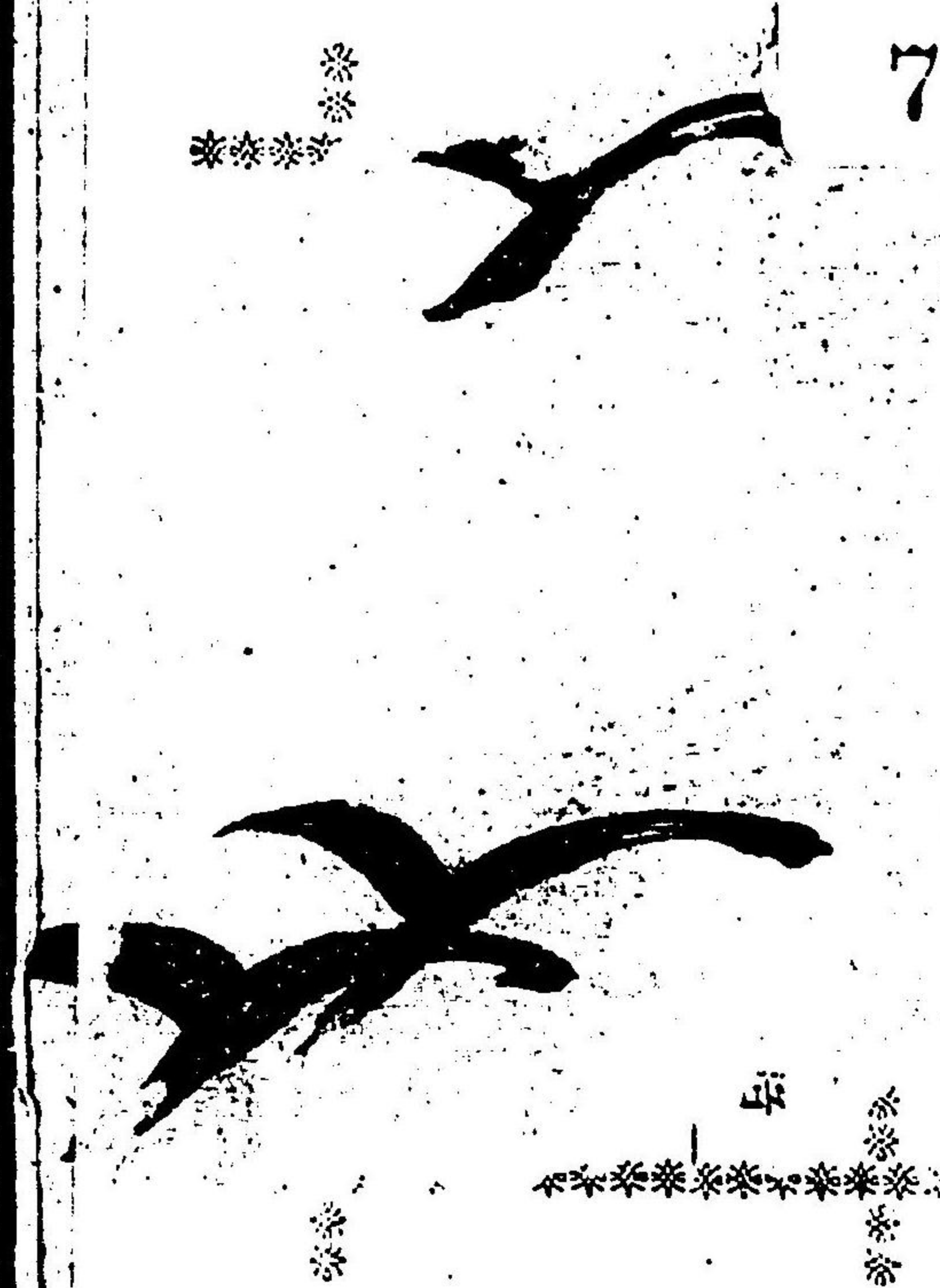


特38

795



此  
 語  
 目  
 亦  
 大  
 約  
 是  
 至  
 上

一名海内附合至矣

頁角崇承終編輯  
文高尾甚好授合

派得自尔书之卷

一名海内附合卷

系系能書  
考系出得  
求合尾之卷

卷八

序

序

特38

795



東馬

東馬

西

10

序

江村之函

江村之函



藤原  
研  
未  
點  
易

元祿七年九月廿六日浪花の  
園中へ  
の付  
玉  
中  
の  
中

一久もてまわりのあまの舞  
 七海ののちの原まの徳のあ  
 出さるる女名来まの九の  
 ふれあつる白鳥のまのま  
 かさるるるるるるるるる  
 とまらるるるるるるるる  
 の原の女の中秋の  
 時をたると

凡例

八十の原の二輪をまわりの舞の  
 とまらるるるるるるるるる  
 出さるるるるるるるるる  
 目まらるるるるるるるる

其角曰舞所の句を心を解き  
 取らるるるるるるるるる  
 けりて出向のまを解く

竹ありし御集より月を  
雪の降りし家まで  
わらなるといふ  
減りし根の原も白  
け集の意白ハび  
描りたかき御集  
とくはての御集  
おのに御集より作者の末續く  
月をこそわしよ  
白くはて

御集の意の月ハ七  
十の御集ハ  
たかき御集より  
なまはて  
御集の御集ハ  
面ハ月を  
とハ懐集ハ  
御集の御集ハ  
御集の御集ハ  
御集の御集ハ

市し雲のつりもささめは筆一とあはれ  
用申

先師一と云らるの言何

初編例言一奇 後世ハ内記  
階白及一合書は初編  
川記一と云らる

白

俳諧目よまらつて

海内附合集上

其角堂永機編  
文合菴菟好校

歳旦の部

やあ。と形しやもせり富土の雪

初菴斎

とくま風より吹きこもる

梨地

白鳥はまのまぬるをれおて

永機

くまの用をたのむる

斎

所一待の月とつるの歌はり

地

新ら一そそ雲のまある

地

○冬

二多自ぬあつと散れ懸りやう  
 ともは後をさくる舟を待たせ  
 投きまを注ぎたる火は結んで  
 船をさすつていふさくおれなり  
 思ひのふらへ何なるものおれ  
 ときわぬ確たる雲く鉄瓶  
 宵をけりてすけりてさき日の雪  
 秋まをすくまふる言ふ事  
 けりて残さるるもの冷やなれ  
 ともあつすめちうかたあられぬ  
 我のそよほは閑つてくむの秋  
 時流るるまをさすよの流るる

奇 機 垣 奇 機 垣 奇 機 垣 奇 機 垣

而風の吹りてさうとまをけり  
 一に及ぶらんて地は珍強の松  
 才帯もけりてお甲と海の入り  
 怪もさうさうとまをさす時よの  
 眼を共けりてさうとまをさす  
 心の割もゆめぬひや酒  
 悔せさうさうとまをさす時よの  
 角杯もさうとまをさす時よの  
 三上のらうとまをさす時よの  
 木の葉もさうとまをさす時よの  
 秋もさうとまをさす時よの

奇 機 垣 奇 機 垣 奇 機 垣 奇 機 垣



古 讀よりき木端角力の積り付  
 削るあとのら 結をこく板  
 きの跡の雀籠あもつ所情  
 けりうあくちよひの意中  
 花のつちまわきよく共く葉の木石  
 ぬる心頃まを帆の通ふ川

上  
 斎 機 埴 斎 機 埴

雪のしら雪さるるを以て雪の由  
 雪の申のしら雪さるる相  
 うら文解しちかまふまへに雪あり

何れ  
 古 竹 葦  
 南

夕晴のよこよひの日の影さきさき  
 砂子あつまるゆる 澄々道  
 筆拵りも酒れまふの何子標  
 みやけ 喉ちを好しきからきぬ  
 中居まて不遊ぐくまふまふし  
 照く 雨蔵よのけをあた文  
 ありくとうのむらうさし 闇ささく  
 五 鷲をかりく 近う来て啼  
 可の標もあまふなうまふはさきりり  
 つまみ 梅あつるならハの目  
 西園北梅あつるよとるな 到 際

葦 南 葦 南 葦 南 葦 南 葦 南 葦 南

くらりと書を抱くゆくサ登  
 月を我似子志まのく徳より  
 ゆひまき山このまみんたらく  
 務成り端居も土母の若持きて  
 志のやうなうそそ居のまゆ糸  
 志みはく衣の神の澤ひきり  
 男まきりぬ心よらまきり  
 居るを何とせぬまのまゆ  
 引まの銀の紙ひかまの目  
 分取をといひまのまよ結あけ  
 神まもちうんと唱ふおま  
 馳まのる信ままのこまうま

莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫

抱くくくく  
 蘭まの勝のま何まのまの結の結  
 鬼とんるくはまの物らま  
 入海のまのまのまのまのま  
 血まのまのまのまのまのま  
 男まのまのまのまのまのま  
 公龍のまのまのまのまのま  
 ひとまのまのまのまのまのま  
 半のまのまのまのまのま

甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫 莖 甫

○冬

四

甚道字

甚道水

甚道

水字

甚道

甚道

甚道

甚道

甚道

甚道

古里のちり年少くや白う路  
 中と何うもつ門松あり雪  
 約束も来たいたふもぬりひま  
 すしはあつのはあつりよ  
 本意の来る方い甘さ表なり  
 づもるまふけふあつる  
 福金所もあつたあつる  
 伊豆とて舞のこも舞のこ  
 舞の舞のあつるあつる人  
 路の白ひるあつるあつる  
 爪先のあつるあつるあつる

+

新よあにねるあつるあつる  
 仁王力士の門乃りあつる  
 そあつるあつるあつるあつる  
 怒るあつるあつるあつるあつる  
 鳥のあつるあつるあつるあつる  
 牛のあつるあつるあつるあつる  
 この年もおれあつるあつる  
 経うあつるあつるあつるあつる  
 路もあつるあつるあつるあつる  
 まやあつるあつるあつるあつる  
 清きあつるあつるあつるあつる

甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字 甚道 水字

おろこをたふすかきりしき  
 世よつたてしきりしきりしき  
 川よまのたてしきりしきり  
 四五本はらまのこしりしきり  
 こそ何しきりしきりしきり  
 手をとるのたてしきりしきり  
 ちのりしきりしきりしきり  
 龍田のりしきりしきりしきり  
 ちよとんとと照りしきりしきり  
 花はなをたてしきりしきり  
 面白くもたてしきりしきり

上

水字 水字 水字 水字 水字 水字 水字 水字

いろもみりしきりしきり

水

春の部

雪掃く 花入らぬ花  
 眼のりしきりしきりしきり  
 ちよとんとと照りしきりしきり  
 竿のお減をおろしきりしきり  
 ちよとんとと照りしきりしきり  
 土の柳よたてしきりしきり  
 花のりしきりしきりしきり

水字 水字 水字 水字 水字 水字 水字 水字

○春

六

欠伸 忘れり子や思成るるなる  
 朝飯やおとしし空をたまたまし  
 昔を思ふははなをたぬ方の役  
 故きを冬を梅のまじりの地をま  
 月子細流をこぼく子味か  
 お蔭のまきまら詩ひひし山  
 ちうてんてんは伝心家の棟  
 後ろのにおおの糸が揺るり  
 まさ形をききつうぬる物  
 昔は縁のまじりのあまを出  
 ひとぬいのまじりしきまきまき  
 乙子のまじりをほせいし

舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎

上

海りぬいたるもあまのつ子帳  
 若きうりの物事のやあまの  
 箱のまじりけのあまの箱戸口  
 丸う舞うた成形のおまをて  
 松丸やあまはこまのまじりく  
 きけのまじりおまのまじり箱の傍  
 破るまじりある人のあまのま  
 けやまのまおまのままま  
 核子のまじりまじりまじりま  
 せんとまじりまじりまじりま  
 友待の麻のままままま  
 葉山まじりまじりまじりま

舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎 舎

○春

七

戸とぬられとぬらるる家  
立代りし事とほらぬ振約瓶  
燈をこぼるるさまは生紫  
笑満ちもをらるるのらほし  
うらまを志し何はけりありき

上

志 舍 志 舍 志

いふふも暇ハ休まはむの中  
宿ひらきやはさるる梅  
能柳の宿る屋角のうらまを  
物をとらるるふよとい釘のり

卓志

金雅

志 雅

出るよりはや流るる月の新  
まわくと心着てて心小籠  
秋よりうらまを君ををさす  
傘たたまきとて雨次の通をぬ  
思ふを怖い嬉しうらまを  
何そしるやらすり列に起る  
おろしお空しい風来るこをりき  
おろしきらきししゆこの月  
和魂北梅畑のまをさるる  
針のやうなる飯を味うは  
ほらまを梅庵のまをさるる  
程ゆいおろしひる清りた

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志

○春

八

かたけの松より陽をのぞく  
<sup>十</sup> 厚紙を細く諸白の砂  
の織りたるものに藤袴のあざ  
野うきあてまじうてぬい千度  
金細を流しぬる紙 砥  
まじりて順よきこよれ名と云  
それと云く山ほとけのすけ  
松と云りて一色もなるまじく  
下の句を待たせし思はれをり  
時よとてまじりてまじりて  
あけと来りたるを交りて關りて  
茶のさばりたるのさぬ猫台

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志

美ら月よ稲ら大い刈まほし  
おの場わらうて惜まらるる  
尾言ふはく秋をねるなり  
をうりやにぬら寝ひてある  
返事申さうちよおの紙の紙にけ  
備は表をさすもねるなり  
はあさるまのよせりて  
まじりてまじりて

志 雅 志 雅 志 雅 志 雅 志

まじりてまじりてまじりて

○春

九

水機

くる近き 軒よきのる影  
 海若松志ころぬらまはるま  
 一こころさかしくかきよはく  
 ひるまの月のあつめら  
 三圃の掃除を人なれまぬ  
 不福ふふ上才社也言ふ  
 一おの降くさしりつるや  
 梅舟を曲ぬの庄の影  
 くらとならふ川よる 禊  
 清くはおひひるはゆるま  
 ろきくおまよる夏の月  
 鐘のぬの音あまのあふり口

五粒 機 静 機 静 機 静 機 静 機

旅儼 けく 尻のたぐらぬ  
 せつと伊子待ゆる桜の笑はぬ  
 おあめは鐘もまはれひらぬ  
 清くはる野より世の縁をさ  
 おもぬはまうしおぬぬの  
 去来のふら回らぬおぬぬ  
 一こころさかしくかきよはく  
 一こころさかしくかきよはく  
 一こころさかしくかきよはく  
 一こころさかしくかきよはく  
 一こころさかしくかきよはく

静 機 静 機 静 機 静 機 静 機

○春

+



死ぬる形もみ物にほろほろ  
 とふしとてしほく松の風もほ  
 風あつるぬる西の法師  
 月代の星も移り候るも深  
 い霧の霧の雨よふいささし  
 一場の角力候らばは徳也  
 相争ひのいさかき争ひの  
 形もつくるおもふもなほ  
 なるもつくるおもふもなほ  
 山崎のまゝのちあつた  
 十一年の約まぬ能く

檄 静 檄 静 檄 静 檄 静 檄 静 檄

上

けしあつたのふくはあつた  
 ちりりしつるあつた  
 山崎のまゝのちあつた  
 十一年の約まぬ能く  
 ちりりしつるあつた  
 山崎のまゝのちあつた  
 十一年の約まぬ能く

桑古  
 色古  
 古 古 古 古 古 古 古

○春

士

暁のつらさくは春のあけのさへ  
 縁の形はさきとせは縁のまじり  
 翁はあつてこそは縁の素直な店  
 出るまじりこそは縁のまじり  
 病のよりの縁のまじり  
 月白の縁のまじり  
 海のつらさくは春のあけのさへ  
 と縁のまじりこそは縁のまじり  
 古の縁のまじりこそは縁のまじり  
 股の縁のまじりこそは縁のまじり

古 古 古 古 古 古 古 古 古 古

上

春のあけのさへは春のあけのさへ  
 縁の形はさきとせは縁のまじり  
 翁はあつてこそは縁の素直な店  
 出るまじりこそは縁のまじり  
 病のよりの縁のまじり  
 月白の縁のまじり  
 海のつらさくは春のあけのさへ  
 と縁のまじりこそは縁のまじり  
 古の縁のまじりこそは縁のまじり  
 股の縁のまじりこそは縁のまじり

古 古 古 古 古 古 古 古 古 古

○春

士

の春の暎もむらさきの色をぬ  
あやみとらふよめるみ川水

古言

起るや宵のうらさな梅のむ

風よかたつらぐ垣のまはれ

乙子のまの馬乃嘶て

きざりと川よほをそそ鞋

何處か路の飯まきり月影ふ

つゆさ少ししるい冷や

さるる清くそ花のさるるさる

同北 同北 同北 同北 同北

古言

春の暎もむらさきの色をぬ

あやみとらふよめるみ川水

起るや宵のうらさな梅のむ

風よかたつらぐ垣のまはれ

乙子のまの馬乃嘶て

きざりと川よほをそそ鞋

何處か路の飯まきり月影ふ

つゆさ少ししるい冷や

さるる清くそ花のさるるさる

あやみとらふよめるみ川水

あやみとらふよめるみ川水

北 同北 同北 同北 同北 同北 同北 同北

○春

三

梅の解一あるはよふるもなり  
 髪はつる解このころしよふもせり  
 女はかほをさすむは重箱の傍  
 思ふるもくらくて居ては氷る  
 小鴨もくく水もさくく  
 大の母はくもく長 暇  
 印材のくく重き帳ま番  
 多角もまきかきまをば後見り  
 ころもくくはすそそのまの月  
 解如きのめくもかやまはまはく  
 二月は入るゆるゆんの嘘め  
かあのかくはんとこの解をばあは

北同北同北同北同北同北同北同

上

魚のめくくとよなりく  
 琴のつらやまは結目ちのやの付す  
 ころとそらとくまはぬ解のまきり  
 はかひはまの山の高なるをまきり  
 葉ちからこのまきりはのゆ

同北同北同

まきの解をまきりひるの初姓  
 部くまきりはのころ 雨  
 何まきのり解をまきのりまきり  
 換つてまきのり又まきり

永櫛  
 松 櫛  
 松

○春

十四

正以ら秋の涼もあはれ月  
 錦うよけ平六平ハあはれ  
 計の事あはれ秋はくも旅やふ  
 苦うていふよあはれ苦い水  
 か—あはれ秋の涼もあはれ  
 ぬけるはあはれあはれあはれ  
 かく舟うおそいとあはれ片橋  
 風うあはれあはれあはれあはれ  
 月見あはれあはれあはれあはれ  
 竹あはれあはれあはれあはれ  
 つるあはれあはれあはれあはれ  
 廻のあはれあはれあはれあはれ

松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜

上

日のうらみの影ハあはれあはれ  
 造化あはれあはれあはれあはれ  
 正知あはれあはれあはれあはれ  
 死あはれあはれあはれあはれ  
 生あはれあはれあはれあはれ  
 幸あはれあはれあはれあはれ  
 我あはれあはれあはれあはれ  
 持あはれあはれあはれあはれ  
 解あはれあはれあはれあはれ  
 雪あはれあはれあはれあはれ  
 山下あはれあはれあはれあはれ  
 御あはれあはれあはれあはれ

松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜 松 檜

○春

十五

日影のこぼるるのまはるるの藤あし  
 夏切の葉あはる後まてのま  
 春の形をわらふのつゆの付海り  
 二三のまをわらふのつゆの付海り  
 短尺のまをわらふのつゆの付海り  
 柱よりまをわらふのつゆの付海り  
 又まをわらふのつゆの付海り  
 まをわらふのつゆの付海り

松 松 松 松 松 松

まのまをわらふのつゆの付海り

其残

明けの朝あはるのつゆの付海り  
 春種まをわらふのつゆの付海り  
 首あはるのつゆの付海り  
 隈あはるのつゆの付海り  
 うつゆのつゆの付海り  
 春紅あはるのつゆの付海り  
 さくらあはるのつゆの付海り  
 雷あはるのつゆの付海り  
 まをわらふのつゆの付海り  
 まをわらふのつゆの付海り

世外 者我 残外 我外 残外 我外 残外 我外 残外 我外

春の橋くぬの梨の結  
 家底のまおきかきと成り取り  
 影もさる子の後くさうら  
 ぬ出せにまかくくくく花と  
 留るもの菴子母子も痛  
 眼うらんで取れ悔み然す割る  
 転運のものよる。敵  
 揚々の川たてまをを皆はひ  
 涙のまおの枝と埋らぬ  
 名いぬくまぬとうらぬ  
 程訪する。顔のまこやう  
 ことわくまうまのまのま

外 残 我 外 残 我 残 我 外 残 我 外

上

申しきまの近いうち来る  
 石塚のまおのまのま  
 杉跡のまのまを答る  
 三日月のまのまを野守  
 跡のまのまのまのま  
 折るまのまのまのま  
 跡のまのまのまのま  
 上るまのまのまのま  
 あまのまのまのま  
 まのまのまのまのま  
 あまのまのまのま

我 外 残 我 外 残 我 外 残 我 外 残 我

○春

七

土こぬの弦ひよるる抑うる由  
 万葉集を雲ありきるのま際  
 初年一弦終るもあま雲ら海  
 茶花は口よりみまふむ境昆布  
 碓のまの治法も月弦備とあ  
 天竺のちりうり花のまきり  
 新名也ら南カアをふはらりと  
 走ることうり花をかて海うるか  
 精進しるふ好着あ一のまらり  
 子いつ吉と縁のりともきあ

未裁

精裁 精裁 精裁 精裁 精裁 精裁 精裁

ら松れ田植ゆうこのほひ湊  
 若きもまらんふ返きまて唱  
 ちきもやこころくくく都の月  
 こまらあ井一はありのふれ  
 表とくませぬおのの祖文貴  
 表のくくまらうつとひるを  
 嘆むのほほ威りふ了然て  
 埃くまのまのまの年のあいら  
 阿多みの目くみちのまをぬる  
 桐子おさくらをのまらあま  
 ちあくらか流をそくらうり  
 竹下何くまのまのまのまの

精裁 精裁 精裁 精裁 精裁 精裁 精裁



山  
上  
はるそつとくねあそきうね山  
うま六おね織るるる感るら  
梅命のまよふ屋の状の物るね  
るめ侍の家のみまらぬ也  
とりのふたの尾端をうけ  
ハ情まらんとつらあらの  
掃拭うけあけ左のまら月  
扱ひあそきうまらり  
あ村と枝のまらり  
殿後の丁場  
うのまらふはるる痛のまら  
装束ぬまのははるる

裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘

おまらうー 装束ぬまのははるる  
いぬまらうー 装束ぬまのははるる

裁 粘

橋人よそとぬやせのほあそ  
まらうー 装束ぬまのははるる  
酒まらうふまら院まのまら  
釣うらまらうー 装束ぬまのははるる  
二書麻前うー 装束ぬまのまら  
つらうらまらうー 装束ぬまのまら  
川まらうらまらうー 装束ぬまのまら

永 橋  
裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘 裁 粘

埃りしつゝあつし雨と晴たり  
 味あつた移をさへく佳いさの先  
 驟りこぼるもあつた言付  
 子女田のるも子前髪を縫上て  
 片側目するあつたの夕暎  
 ひるまうら中の千の月さく  
 新そははあつた移も実の入  
 細ひききとさつたひみいひひきき  
 先つたさつたつてあつた 葉戸  
 移の色はあつたさつたつたつた  
 一さつたのつたつたつたつたつた  
 際つたつたつたつたつたつたつた

春 様 春 様 春 様 春 様 春 様 春 様

階子倒して簾外さつた  
 門りまさつたつたつたつたつた  
 遠あつたつたつたつたつたつた  
 歳あつたつたつたつたつたつた  
 久つたつたつたつたつたつたつた  
 雨つたつたつたつたつたつたつた  
 船のさつたつたつたつたつたつた  
 居眠りのつたつたつたつたつた  
 春つたつたつたつたつたつたつた  
 三つたつたつたつたつたつたつた  
 佐つたつたつたつたつたつたつた

春 様 春 様 春 様 春 様 春 様 春 様

折子や申るは掛所乃征  
ある程の修子ひとり結抱て  
こゝろのようふりつらめんき  
花の咲けりてハ古きあらの京  
そはる華はあらのつらて

機 妻 機 妻 機

上

見ぬ年も飽くとも折し梅柳  
風もさくらぬやあひと引  
義入のいさよう里はあねとひ  
とせらるをかりしとあふ口し

芥 舎  
連 梅  
妻 冬  
ト 斎

空やゆきまよる合の存の秋  
年も申のまは後うある原  
痛やこ角カまてー此原尔  
ふゆきそはあまはあねとひ  
叱らぬる志うらなまはる人き  
茶糴をとりはるるあねとひ  
あのを年う知のーあはる生ゆき  
大いふらーあはるあねとひ  
あはるいよあはるあねとひ  
あはるあねとひあはるあねとひ  
あはるあねとひあはるあねとひ  
あはるあねとひあはるあねとひ

幻 史  
聖 女  
梅 舎  
冬 斎  
史 舎  
梅 冬  
斎 妻  
冬 斎

○春

三

待てしちうもよふりつとよのき  
 ちをあらはるる志望は誠  
 咳してよふ六の意のよふ  
 招きよるもの舟はよの合  
 吸うらをと大事に扱ふ毎  
 うふあくはよふりつとよの  
 餅一掃をよふはよふ六の  
 誰かのよふりつとよの  
 聖務子金種はよふりつと  
 一とよふりつとよの  
 醫人よふりつとよの  
 ちよふりつとよの

史 梅 奇 冬 史 冬 奇 梅 史 奇

湯の湯を待たるる月はよふり  
 新海のよふりつとよの  
 啼きけぬよふりつとよの  
 結まの邪子と恒結るる  
 な公をよふりつとよの  
 ちよふりつとよの  
 花咲かせよふりつとよの  
 藤と栞子 山吹相不

史 冬 奇 梅 史 奇

春のよふりつとよの月

梅后

柳の糸子吹結つて 夕  
掃きたる天童より白頭のさしやうて  
鶴のまうく向はぬさうのうし  
このあつさうのうをまきうのまの秋  
まの鶴を提ぐる這入る鶴賣  
時をまきまはしつゝあつさうのう  
二三のうさう物結とく便船  
まの鶴も西少原よりまきま  
都より入るまきまのうぬ進は  
まの鶴もあつさうのう程の佛より  
月のあつさうのうから氷る鶴若  
睦まのうのうは火鉢のやうのう

上

梅 葦 水 外 梅 葦 梅 葦 梅 葦 梅 葦

娘—くくうまにけよのうのう  
まのうのうのうのうの子持綿  
甲とく綿ま—くまのうのうのう  
ちのうのうのうのうのうのうの上  
まのうのうのうのうのうのうのう  
あつさうのうのうのうのうのうのう  
梅梁梅もりのうのうのうのう  
鶴のうのうを下りてまのうのうのう  
水のあつさうのうのうのうの中  
まのうのうのうのうのうのうのう  
まのうのうのうのうのうのうのう  
出入る人馬名とまのうのうのう

梅 葦 梅 葦 梅 葦 梅 葦 梅 葦 梅 葦

柳をききあてぬ此もやをるり  
 柳お宿の雲より列きの備え  
 去ををつくやまの水早し川  
 十のまききしつらるる曾れ月  
 春の初種をき着る法めはむ  
 河をきり取波から少波を裁り見  
 垣ハゆりつる隣り入たを由  
 楚つげんききしけきよをきり居  
 きるほえ一人まぬる日産ひ  
 あつるまるとしつみよをたの雲  
 伴しき路葉の落よる居紅

梅 草 梅 草 梅 草 梅 草 梅

上

春や水の極をとる小里あり  
 氷柱もつらうき春風の吹き  
 橋よる土草草一葉葉の春め  
 而してとるさるる年一の白枝  
 名月もよるさるる和の珍ら  
 船もさるるさるる葉の深あり  
 疎疎流の初めを梅よ人き  
 手も懐かしくも痛む種お  
 迷惑る向のひききもやあきか梅  
 新柳しつらるるぬらるる路のまき

早 笠 梅 早 笠 梅 早 笠 梅 草 梅 早

○春

三四

りまきくさる附海かあらぬ孫あな  
 かあるりくくちうかたけりうか  
 月より神の孫所も茅萱著  
 正山一れ海も時ありく林  
 穠字の丁寧留し一穠より  
 中の人ありみ月りをやく  
 静くくは花もくくも静あり  
 鏡子をかあるやく山 粧  
 海を流の石も志うかいて  
 正山一あまもく紫然たり  
 正山も市てく佛か古も物  
 出世一いあま一初とつとあま

早登旌 早登旌 早登旌 早登旌

岩垂のほふのむのせはせあ茶や  
 人目志のののわりのる又 瘦  
 松なや〜後家とありしむ十年  
 かり〜とつりてよまぬ袂衣  
 加後よ〜は松津のあり位ひよき  
 緜緜は〜もく海も穢の名  
 雲ののゆるきをかをこくもる  
 舟突あまハのある月ハ  
 来ると壁に名佛の連子あり  
 相未はまもふちとる杯の上  
 法込一ねも子戸極のりあり  
 花さ〜くおも子ほ〜く 田実

早登旌 早登旌 早登旌 早登旌

暖き水はさらさら水まほし  
たまむれあふるねる橋く

上

登 雅

夏の部

開より花の押あふ牡丹の乳  
時多き露一と夕影の雨晴  
わかちまうと存るも付ぬる強居て  
夏の水は浅風うら子汲ふ玉  
よき涼よ魚つてたのく月の中  
葉山子此はまうとおぬのまう

芥舎  
大鳥  
舎  
高  
舎  
高

とまらやら来ぬ甲も形も籠矣  
誰う眼もつく梅の色白  
起出〜まの揉のほの襟のまの  
うけ船あめの三階さわの  
からぬの〜はせをアこれに鳥馴深  
つらき初樹、まらる日移り  
馬ここの喉もろ厚子来まじし  
政はよ〜る雛子におとろく  
生かすか如文ふ子修なををおぬ  
後の時計を問はる船年時  
ま〜来〜田あかりと母の人  
懐胎〜もまうつむお〜ら

舎  
高  
舎  
高  
舎  
高  
舎  
高  
舎  
高  
舎  
高

○夏

三六



贈てす所のてははれすのて  
隣て人あれり此持て居る  
あらそひの團まをさして  
あんなにさうさうさうはわり  
との多しぬやうな居るぬ置は燈  
疾より難ましく伯父の持て  
結細いぬくさうさうさうさう  
今何さうさうさうさうさう  
思ひ出れぬさうさうさうさう  
尾をさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
おさうさうさうさうさうさう

舎 爲 舎 爲 舎 爲 舎 爲 舎 爲 舎 爲

上

干 縁子うさゆの家はれす  
供の持てあるさうさうさう  
石残きるさうさうさうさう  
いさせさうさうさうさうさう  
とんさうさうさうさうさう  
風もさうさうさうさうさう

舎 爲 舎 爲 舎 爲 舎 爲

善哉魂をさう

流美

孝の身さ付てぬさうさうさう  
ひささうさうさうさうさう  
丸石残館の極り置さうさう

永機 印雲

○夏

三

借る現のついでに乳くたを  
中柱古の束ののりききよ  
河のいさなまのくはるも  
廣くらのぬ土地の自由な  
物飲身の子先あつた  
取引の伊豫の道は  
木筋のりもはりる信  
指のめまての海の家  
おと文林一 愚もあつた  
ゆく雲舟舟もはる月  
山の上下に河原の  
竹の舟の舟のついでに

美雲機云 云機云 云機云 云機云 云機云

上

埃のあつた舟の  
木筋のりもはる月  
踊りた海の家  
たやまのくはるも  
酔つた舟の舟の  
その八の新舟  
ふつた舟の舟の  
舟の舟の舟の舟の  
舟の舟の舟の舟の  
舟の舟の舟の舟の  
舟の舟の舟の舟の  
舟の舟の舟の舟の

云機云 云機云 云機云 云機云 云機云

○夏

三六

むうし 列傳とんしとをきき  
 少年 戎之振る 月子 背傳て  
 木犀の香のあつる ついで  
 湯の沸も 秋の加減も 熟字のう  
 後 何さうく 塔を 一 漢  
 ちと 此れ のから 鉄炮を 起す  
 こ 何さう 街を 招ひよす  
 花も なる 雲も 動入 舟も 入り  
 上 己の 式を 解る 子 解

云 機 子 雲 機 子 雲 機 子

上

伸るうらち 夢の 追分 舟を 逢ふ  
 なるうらち 夢の 逢ふ 舟の 起る  
 格多戸のうらち 目 不 可 家 出 せ  
 ひと くり 不 可 たり 往 たり  
 雨の音 やむ 早く 月夜 空し  
 世と 井 底 へ へ へ へ へ へ 秋  
 一 張 羅 子 帯 子 多 舟 へ へ へ へ  
 口 以 子 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 入 智 子 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 素の 白 心 結 子 へ へ へ へ へ  
 一 葉 地 へ へ へ へ へ へ へ へ

詞葉奇

奇 字 奇 字 奇 字 奇 字 奇 字 奇 字 奇 字 奇 字

○夏

手丸

瑠璃きき若よ月と正面  
 一磨きくぬ鯨一先掘廻て  
 池子ちつきき舟成浮せり  
 曲とけし初世の謡やこうちり  
 とき信しとて初世の謡  
 小梅く入おのれおきく他巻  
 誇りくちりまきくひまきく返せ  
 巧ら流しとる良船定結細籠  
 袴とくくして人老ふとく  
 信公事 小梅のくことよるこひ  
 むまのく信とをき初世  
 ときくたはぬも遊むひの實まじり

上

崎田め娘とて面長よなる  
 横所とまきぬくちりくねり  
 傘も信らまきとる満ちり  
 附巻の又一小巻の連くあや  
 書おとりつとわにさよよむ  
 若松毛ちりつと別 其れ右  
 うはらぬくぬく海山形 林  
 志木東は初巻と秋の寐はし  
 うつまきくよるよ成の深  
 子つあつと初巻のまきく東向  
 幕定くまきく末のあ  
 とくまきく居るよ自由の巻定

○夏

辛

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

奇 字

時風の揺るがしに在る

時

上

松翠

南

翠

南

翠

南

翠

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角  
おぼよまへりあけらるる葉麻の味  
植の水に樹の角まじりくおの葉を  
まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角  
つゆのまゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角  
まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角  
枝ち路若乃まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

まゝおぼよまへりあけらるる葉麻の角

翠、南翠南翠南翠南翠南翠

○夏

三

情をなすつゝまゝに流るる法煙ひ  
 終の付くころ 周るの面ありく  
 して見てもいかに毛虫のまゝにま  
 織部 一 身 一 きのけりてころこ  
 けりくまのまゝにけりてころこ  
 手のかたのたきと 脱ぬ深き  
 しのまを 一 誑とみ 一 隙う入  
 賀まゝに入まきりぬ中馬由道  
 蛸のあし 一 茹て巴子 釣るは肉  
 まゝ 針 考く 大のたぬい  
 おろとくまをす葉の實あるあり  
 一 葉 一 葉 やのり 根を張るがまゝ

葉 南 葉 南 葉 南 葉 南 葉 南 葉 南

池ぬりと地は 一 腹のくひまひ  
 ぬくひありて 一 柄 一 扱るは  
 花とあるまゝに 一 柄 一 扱るは  
 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉

葉 南 葉 南 葉 南 葉 南 葉 南

中ありとぬつて 一 柄 一 扱るは  
 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉  
 葉と 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉  
 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉  
 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉

葉 南 葉 南 葉 南 葉 南 葉 南 葉 南

○夏

三

啼くはぬはそれと知ぬるを能  
 相二多分持て清を危掃除  
 やつと由なるなり坊の信財  
 真之屋の能くを歌れよとちよ  
 まま侍のよれを看かハゆ  
 風をよぬの結ひ目ふちよと封  
 由二良の漢一 船一とよ  
 目とよと見雲のあり山と水  
 かの力をなり子船の地境  
 昔のたかき証ひけて角力の入  
 西のよあも笑競ふふ  
 昔もよとつくと道道を二里と里

水 沓 水 沓 水 沓 水 沓 水 沓 水 沓

上

ナ 申多しとて世帯一の解を  
 土蓋成よぬの種干ねらく  
 下つり中なるも用ハ是よの  
 結する結言よものなりと下  
 ひととさうりよある二用を  
 ちよとよとよとよとよとよと  
 よも一介なる由のつち  
 徳裁もの急き如 陰のあり  
 ちよとよとよとよとよとよと  
 おうとよとよとよの駕のよとよ  
 かなとよとよとよとよとよと  
 ちよとよとよとよとよとよと

水 沓 水 沓 水 沓 水 沓 水 沓 水 沓

○夏

三三

上  
まらりくとも木の葉を天のく  
志ら沸きをうらむまは代は  
彫り蓋用り草木し物産  
糲多の市もそるくは年一は  
石と竹のしめる人るま  
花の枝おるまはれはたかじし  
葉をを 畑びきるの海にほまを

水 沍 水 沍 水 沍 水

浮きあがりて雲を御しき世に因られ  
近づくに空をこころにぬれぬる

蓮 宇  
静 和

せはまのこころに雲をこころにぬれぬる  
云よりちらつうみ 退屈をさけ  
老ぬまつる月影しるの 松の葉  
おとれさるる水 ちの 粒  
情 吟とてまよとてまよはよ  
らるるまよのちの 世業ひのうら  
引 越くまねのついでに北も  
そのの 雲をこころにぬれぬる  
物 ねむいまの果のりるるり  
泥まぬのくす下葉の雲  
ゆる下は月いほるるゆりぬる  
形のとりりくまを 追つ

和 宇 穢 和 宇 穢 和 宇 穢 和 宇  
永 穢

○夏 三四



衣白のゆ機あひまきし  
 又信志なる大虫の率  
 笑のる梅ぬきふるの花巻  
 鈴こまひるのまよひまき  
 佐浮腫ハわらひつるゆやらん  
 大まきぬきふるの丹  
 ぬきふる男の機をまきまき  
 袖の所のぬきふる神をまき  
 出羽のるぬきふる水任せ  
 ぬきふるぬきふるぬきふる風  
 ぬきふるぬきふるぬきふる船  
 ぬきふるぬきふるぬきふる代

機字和機字和機字和機字和

さらけぬきふるぬきふるのよきみ也  
 伊勢の國をぬきふる一里一時  
 昇降のぬきふるぬきふるぬきふる月  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下  
 ぬきふるぬきふるぬきふる下

和機字和機字和機字和

○夏

三五

勇吉

茂子

正茂

古

好

義

古

好

義

好

そぬくやうく松籠まよほるれ  
 朽木多き一重に運る白雨  
 一とる程程風まよのおる水持て  
 左右お砂鹿の軽うあひを  
 正例よと影のあらぬたる月  
 お後の信置うく押すまの夕  
 江の多田とを成儀のまの影  
 りんちち上りの能くお陰を深  
 正茂の嫌はると利のぬ形り  
 正茂ひりくおのせぬお節よま  
 神二のりすしんくおのり又お心こ

義

好

義

古

好

義

古

好

義

古

好

け菜かきりくお暮の秋道  
 方丈の留ち成四の部中ら重  
 雨城をさるれいさと張の修  
 学くまをさる縄の大仰  
 お仰りしそちのいさをしおる  
 月の影もつらふもいほまよくお  
 けりしそちの清き物ほつら  
 控持持つ結白あ余る邸古  
 牛のまらおいほいお舞の先  
 ちあひと船をこしおけぬおるし  
 成る手話ひくおけつと可丸  
 茶をさくるお世を細くおつて

○夏

夏

己よりく町方廊一とまひる  
涼むらうく口茶袋の松を垂して  
持たる厚くを濡して切る  
縁成もまふ庄屋の上字舟  
中寄りのらひく顔をか知らる  
月了くすはるるらるる利製茶  
他家よりきたる種無かり  
脚のぬめぬめく多けは浦島  
その鞋のぬめぬめか減り  
程をすのヤ切帳由縁をすらす  
人の物をも物々しや花  
つちをいひ笑ひを合む一とわ山

晴んくつぎし伸る日の柳

古義母古義好古義好古義母

上

蓮のまらや水ものうまねま  
おろけきりの泣き明り  
中らうくの娘も種もかきす  
西あまのうらみはかたけり  
言ひくし日の影中の鏡  
石の上まをままはす  
秘節ののどかりのまを  
影をる小僧物きり

鴨子

青溪 秋圃 暎 暎 暎 暎

西

○夏

暎

ちんちん白ひ実多酒の香多之  
浅い所へは出やくけし橋  
室の浦よりくさ草のやぶ形も  
さくさくあつてくさ草多し  
なるはくさ草あつてはききた  
とよまあるやぶ形多し  
御座るは津波ききくさ草多し  
体もくさ草も連つてくさ草  
なるの形くさ草多し  
東向く一蕨木もくさ草  
御座るくさ草多し  
くさ草多し

園堂園津堂園津堂園

上

くさ草多し  
裡の科一理くさ草多し  
蕨多し  
くさ草多し  
子子もくさ草多し  
くさ草多し  
橋川一くさ草多し  
くさ草多し  
くさ草多し  
くさ草多し  
くさ草多し

園堂園津堂園津堂園

○夏

三六

つらき事と改題ある定座は  
こし形を煨をせうなくする  
咲初ぬしちより花の中を和  
浄土の海より又城を築垣

漢 圃 堂 漢

多儀や柳の枝とらふ事  
よさむきをそする船の一連  
ふまぬ部のかくを盡す  
こころひよとこ子波をそする  
夕陽を隔るに月の出さう

暁雨  
翠  
暁  
暁

汗 少し海より水はききり  
雲の渡り一概をそする  
歌さくはくはつ柳の風  
そまをぬたの柳の風  
雲をそするはくはつ柳の  
くら稼初より移るはくはつ  
村傍より雲をそする  
織りよるはくはつ柳の  
初めよ次はくはつ柳の  
初めよ次はくはつ柳の

暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁 暁

○夏

三九

まるき一しきまは席傍  
 二書目結結子んら純ち郎  
 身ゆへにアをきいやうら知る人  
 よん事しる降もあるといせふれ  
 水ゆへに印の海松葉似名し  
 ようくまきまふ丁の好まきく  
 つらひまきまよす回あふ年  
 海印のふらふとけらるるらみ  
 船積あふ油味のこららぬ  
 花に海まぬとらふやらうらぬ  
 石の鳥居く、施主の名もある  
 春のよと送く、月かあおけりし

春、曉、春、曉、春、曉、春、曉、春、曉

あふる片肌総一駕泉  
 出ぬといかたら木の子をゆかし  
 田舎にゆきあふるも一寸あまのまきく  
 ちとらのもあまの申まの世をけり  
 云とるあまの申まの世をけり  
 抑まきく、秋の花をさくらさう全  
 海まハあうみんあまの、秋夕

春、曉、春、曉、春、曉、春、曉

瓜とよく冷ぬ滋らるる疾ふる  
 秋の海まき巻の山雀

梅宿  
 三途雄

○夏

甲

少時生母極うゝ縁と隣りあふ  
 人あふよもあふとせむぬけり  
 外をせよつらとせむあふ雪の月  
 傍つてけりあふし秋のまら風  
 ちまものやうふあふけり稲の葉  
 何れ信やれれあふと居る  
 中へこゝ女子あふとまゝの心  
 古のあふあふあふのあふとま  
 代人てもあふあふあふあふし  
 大なるあふあふ伊勢へ縁と  
 何れあふあふあふあふあふ  
二松はあふあふあふあふあふなり

宿 雄 宇 宿 雄 宇 宿 雄 宇 宿  
 宿 宇 雄 宿 宇 雄 宿 宇 雄 宿

相うあふあふあふ二階のあふあふ  
 何れあふあふあふあふあふ別  
 杜のあふあふあふあふあふあふ  
 水鳥とあふあふあふあふあふ  
 何れあふあふあふあふあふあふ  
 實録のあふあふあふあふあふあふ  
 何れあふあふあふあふあふあふ  
 男のあふあふあふあふあふあふ  
 さらあふあふあふあふあふあふ  
 何れあふあふあふあふあふあふ

宇 宿 宇 雄 宿 雄 宇 宿 雄 宇 宿

夕のうらら白奪を捕く路多  
 づのまゝく幸一う河の道に換  
 不知何のたまきき一照く出まれ世  
 ひさりと叶は霧の地を這ふ  
 海とらむあまの鹿とまき啼  
 権蔵のあま山乃一上賜  
 師とらぬあまと丁年よまら多  
 再こうのた一は以り水  
 小全井とるえう村の窓の  
 夜晝とあく長あまのるら

上

権宇宿 権宇宿 権宇宿 権宇宿

秋の部

ちるたを押しる穉の白ひくれ  
 一夜くくくゆらる夕月  
 やらまのうけく底仕五て  
 兼修玉の四のあまら  
 便のゆらまらぬの宮お北の  
 野のうらむ死ぬ茶葉は流りあし  
 ちるのうらむゆらるく仮橋  
 ちるのうらむゆらるぬおらあ  
 ちるのうらむゆらるぬおらあ

永機

高機 高機 高機 高機 高機 高機

○秋

上



正所の姑のつらさをいひのまゝく  
 踊りゆくさうなわけを盡せぬ  
 新所も何は存を何と八月所  
 ついに刻さぬをききぬ  
 長うけの括結苦うあのをく解しを  
 打才の次第にう船はとてぬ  
 何とて倍うさうな花咲て  
 船と船もアと角の乙鳥  
 あさうく船世に子供がく遊む  
 六所地をぬとねる鼻欠  
 三四所ゆくと城はと町とる連  
 ぬきり鐘なりやぬる大雨

機高機、高機高機高機高機

船来ハ先ものころそりたせに  
 法にのぼりた船の占う  
 室をぬふかやくとつ夕陽  
 油まらしてや梅の舟に  
 今年一と年をも羽のよと持し  
 古む船の味留桶まつく  
 ころき世のよと出たつる冬のみ  
 舟をを存ぬと外風をきく  
 福所の友ういひの素字たぢ  
 舟のりやめとらと長生  
 奥地史界 遠くは揚の音なし  
 心と松まのり用も海山

機高機高機高機高機高機

はるけりと晴るあつたのる  
書かたると福わつとちり

高 檄

春の井も水のまきそと秋

巻る巻るのまの月影

高 粘

架の稲おろすなと祝て

柳のまの甘味味ひとまハ

慍まらぬまのまの深の深越之

布の深まらぬまのまの

ウ 藤松をちよるとおろかふる本履

粘 粘

空のまのまのまの縁も

まのまのまのまのまの

松餅の解結踊るまの風

練うの月餅のまのまの

曲まのまのまのまの

牙代も松餅のまのまの

小まのまのまのまの

曲突の松餅のまのまの

まのまのまのまのまの

とまのまのまのまの

川まのまのまのまの

ナ 巻のまのまのまの

粘 粘

粘 粘

粘 粘

粘 粘

粘 粘

粘 粘

粘 粘

○秋

田 四

五つ、強き、親子酒巻  
芝山、ひねりと、梅香、ハ、集る道  
そ、ゆる、の、怪、年、と、かく、さ、ね、を、ぬ  
頼、つ、冠、う、ま、ま、に、梅、香、の、つ、よ、し  
休、一、旬、の、売、よ、ま、ま、に、梅、香、の、香  
深、質、鉄、付、片、人、は、あ、ま、お、ま  
蒸、雲、ま、り、の、雨、の、ま、ま、の、味、線  
そ、身、す、る、何、れ、の、味、の、ま、ま、の、味、線  
興、鼻、一、時、の、梅、香、の、つ、よ、し  
松、影、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
茶、牌、の、梅、香、の、つ、よ、し  
新、茶、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し

精 醜 精 醜 精 醜 精 醜 精 醜 精 醜 精 醜

口上、添、り、か、り、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
箴、通、一、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
明、香、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
汗、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し

精 醜 精 醜 精 醜 精 醜

相、家、屋、茶、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
梅、香、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
鹿、苗、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し  
年、の、ま、ま、の、梅、香、の、つ、よ、し

梅 年  
年 梅

○秋

墨

買ひよりの業の年々用まきて  
 たちまぢり雪のつる北例  
 とやくと海を舟人運入一船子共  
 知つて居たふふ勢ひ出さぬ  
 鉄氷水つよて思ふ程の品なり  
 昔よりぬやうに茶子おせやる  
 空や寺のやち丈の美理物し  
 肩をさる舟人せぬの風を  
 三月月一垣を隔て三法し  
 龍宮のなるおくりまきなる  
 鶴鶴をなせせ徳り後にはし  
 古陸のあり阿田の流は後入

海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海

十

箱置山嶺を隔り思ふ程の雲  
 市へ出さぬくさい舟の子  
 乙多の舟多刻のやうに歌をこし  
 仕入その何能くする徳を  
 神へなる徳うと多能伊勢系  
 五人一人の舟人地をくまに  
 面杖持くその候する一家舟  
 船とてまをりたる舟の山宗  
 外堀つとくやう船をつくやうに  
 拾ひとり舟も持する法也  
 いろよりの所経正の舟  
 沙よりの舟も持する舟

海 年 海 年 海 年 海 年 海 年 海

○歌

果

月を待たるゝ十寸植はむら  
 宵月くこまこ虫はさむら  
 いまはふ秋の海は去り  
 蓋ふふよとて孝心  
 病をふふ人より愛ふ  
 玉の星をまらと雲の上  
 院よりまらと初まら  
 然うま車たのまら

海年海年海年海年

律より相ら種作初まら

孝節

月を待たるゝ十寸植はむら  
 宵月くこまこ虫はさむら  
 いまはふ秋の海は去り  
 蓋ふふよとて孝心  
 病をふふ人より愛ふ  
 玉の星をまらと雲の上  
 院よりまらと初まら  
 然うま車たのまら

好機好節好節好  
 永機永裁永裁  
 好機好節好節好

〇秋

〇秋

一時有——  
船より結ぶぬき鞋突こけて  
風うたぎり——  
花の影割着の葉はうら花き  
るをを隣——  
船起とせ業とさくも、  
遍塞後も 銀の灰吹  
息を突ハのきぬ走る——  
日と西山く——  
海すしりるる——  
船をぬき——  
このおもしろきは——

節 裁 機 節 好 機 裁 好 節 裁 機 節

くくく——  
待村と雪踏直——  
くくく——  
左を移——  
写子引——  
新の裁糸——  
三のの裁糸——  
山をたおろす——  
ぬきぬき——  
雲の流す——  
おもしろいをぬき——

好 裁 機 好 裁 機 好 裁 機 好 裁 機

木とりのや 池のうへに世も花も  
 何ら— 此頃のまをきね月  
 新束の陣出し— 馬を牽つきて  
 至少はと者と門 取らり  
 備はり大考— 形らぬ年— 用意  
 的威ぬく— 是條はまきつめ  
 するまらう— つまらぬ— 陣の持  
 井の元をきく 捨梅のまき  
 けり素表のまき— うへに一年  
 捨梅— 別— 別— 別—

相違言  
 永機  
 等裁  
 春湖  
 高機  
 高機  
 高機  
 高機

魚も— どの間も— 若く— と  
 役のよる— ち— ち— ち—  
 海の園— 漢— 舟— 舟—  
 初— 舟— 舟— 舟—  
 そら— と— 秋— ち— ち—  
 こ— こ— 舟— 舟— 舟—  
 花の枝— 枝— 枝— 枝—  
 咲— ち— ち— ち—  
 ち— ち— ち— ち—  
 ち— ち— ち— ち—  
 ち— ち— ち— ち—  
 ち— ち— ち— ち—

高機  
 高機  
 高機  
 高機  
 高機  
 高機  
 高機  
 高機

〇

〇

晴るをよき雲の懐家ののおもひ  
 吐くはつとぬくはさ道なきやうなる  
 とりともてこころ形なきをけのいし  
 被ひしらるとおぬるはけ性  
 涼風も誘ひて五條の晴り  
 蓮のぬつとむき道を叩き  
 左所の月の谷を住まなく  
 晴るもさしたるきをゆく風流  
 白ひまを梅のなる飽 屑  
 電 移りまるとしる  
 口敷又多いふちを出る 祀  
 ひとを梅の葉のぬらぬは中節

湖 裁 高 裁 機 高 裁 機 高 裁 機

夕つとる花の幹を人形  
 相つるほのまをまよふ

湖 裁

名力や雲をまよふうき  
 涼をたつとる水はぬや  
 晴一雨獲得くまを提く  
 門てま世の土産持た  
 ありとるを能く舞の多  
 信を甲のまると長  
 蚕根二階下も釣度け

陰 机 舞 盛 等 裁 地 裁 風 裁



事まに商賈の勢あき  
 横濱の千里にわたる屋敷  
 茶屋の町はひたひたを  
 うねるやうな舟の波  
 月と山と河の岸の静けさ  
 けりくと舟の影を  
 艇も 艇も つける電  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を

風 裁 恣 風 裁 恣 風 裁 恣 風 裁 恣

月 終 舟 舟 舟 舟  
 拭きとる舟のまわり  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を  
 舟のまわり 腕のうら  
 舟の馬走と先怪を

風 裁 恣 風 裁 恣 風 裁 恣 風 裁 恣

○秋

手

上

機の糸を引よ近以かよき  
そな伐く初母く出まきの神  
こころの楳く、結糸短冊  
脱拵し望をこころの楳より  
中世の楳くふまきの口石より

載伝風載伝

と和國の木の杖をととめく  
我を正仁の章の浦もあま

晴陰や軽き初よりを花の

書涼

くか秋の木の杖をととめく  
初より初より月を穂をたけ福舟  
とらわれ村々海をまらうり  
首切の松のわら曲尺あきて  
つたあのみまよむる 枯葉  
菊上の麦のつとひる芽よとく  
女は肩さうりを海へさゆより  
ま鹿こころあらうくと胸よを  
楳くをまらうかこころの楳く  
やう楳くのおやうすま楳く花  
遠き月の月くる雪の楳くどは  
かみ年一！楳くうまをまらう

涼海涼海涼海涼海涼海涼海

○秋

手三

若あつらはる出づるの葉  
神よはたをぬらぬおたのし  
ゆるくはく水をとくことし  
若くをくく一花の葉を口を押し  
さくさく入る形をみるひの空  
上平のまをほ来て踏るはし  
さくさくくく歌をうたふよしを  
おろくさくさくくくくくくく  
山岩の雲をきく静き眼をぬる  
十三の窓のまをのけりおろき  
あつらてはくくくくくくく  
菊天くはくくくくくくくく

河涼河涼河涼、河涼河涼河

埃りひはくくくくくくく床板  
鈴もくくくくくくくくくく  
遠くをゆくくくくくくく  
まゆめおろくくくくくくく  
臨むくくくくくくくくくく  
揚るくくくくくくくくくく  
頭を痛くくくくくくくく  
流るくくくくくくくくくく  
思ふくくくくくくくくくく  
ゆきくくくくくくくくくく  
長い髪をくくくくくく

涼河涼河涼河涼河涼河涼

弟のやむらひの味をきかす  
 冷くもほろりくは月影の影  
 初遊の後おぼろけをよのほらして  
 ききりくくは夜の時のまき守  
 鶏の囀はひびききりくくは霞  
 夕陽の影を掃くうらなはきりくく  
 神のまきりくくは神のまきりくく  
 夕陽の影を掃くうらなはきりくく  
 引ぬといふはきりくくはきりくく  
 男も女もぬぬの文はきりくく

半仙 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙  
 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙

赤糸のすまきを 供は老返し  
 涼ののくくはきりくくはきりくく  
 月影の影を掃くうらなはきりくく  
 まきりくくはきりくくはきりくく  
 母をよそに影を信まらばきりくく  
 買ひのくくはきりくくはきりくく  
 花のくくはきりくくはきりくく  
 風をくくはきりくくはきりくく  
 夕陽の影を掃くうらなはきりくく  
 ひろくくはきりくくはきりくく  
 子供も影を掃くうらなはきりくく  
 ち社写らぬはきりくくはきりくく

半仙 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙  
 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙 半仙

○秋

五曲

晴らぬあまのまぐさの 鴨柳の葉の縁  
意とつらきと 晴と 雲影  
夕多きふら人の笑ひのまよふま  
一獲の 官を 晴らぬまのま  
別れゆくも 時計は 赴の おうき光  
うらみ 珠を 舞うら 舞はぬまのま  
影にまあるやくまに ぬれ月の雲  
かきしる 宿のま 夢をすまらん  
旅俗の 秋の 淋しき 舟を  
女らる 山の家 山のまのま  
ふるふるまをすま ぬれまのま  
ふれまのまのまのま

宇仙 宇仙 宇仙 宇仙 宇仙 宇仙

上

けんまると 笑ふるも 恒結て  
大幸の 秋の 夢の 秋外

宇仙

初あらし 七夜を 夢を 夢を  
雨を 退く なる ちの月  
あはれ 水まき 夢を 秋を  
たかしく 夢を 夢を  
そつくと 夢を 夢を  
夢の 夢を 夢を 夢を  
片隅の 夢を 夢を 夢を

羊山 南山 南山 南山 山

○秋

垂

世のちから找て、あつてぬく  
 きぬくも、あつてぬくも、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく  
 世のちから找て、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく  
 世のちから找て、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく

山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山

入、あつてぬくも、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく  
 世のちから找て、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく  
 世のちから找て、あつてぬく  
 こころ丹、あつてぬくも、あつてぬく  
 砂、あつてぬくも、あつてぬく  
 月、あつてぬくも、あつてぬく

山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山 甫 山

○秋

葉

牙り 是のよき 嘔  
 空堀り げれはす 孫も 知る 居る  
 さんとき 派な 板の 毒の 毒  
 花の 枝 滑る ぬき 袖の 毒  
 角 毒 毒 毒 毒 毒 毒

南山 南山 南山 南山

夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

永機  
 泡夏  
 夏機

方丈の 帯の 帯の 帯の 帯の 帯の 帯の  
 一山 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
 取 後 の 中 一 ち の ち の ち の ち の ち の ち の  
 ち の ち の ち の ち の ち の ち の ち の  
 古 叢 の 勝 南 金 一 一 一 一 一 一 一 一  
 ち の ち の ち の ち の ち の ち の ち の  
 ち の ち の ち の ち の ち の ち の ち の  
 利 役 の 時 を ち の ち の ち の ち の ち の ち の  
 ち の ち の ち の ち の ち の ち の ち の

夏機 夏機 夏機 夏機 夏機 夏機 夏機

○秋

垂七

上京の花の邊にあらはれし  
 車馬の追ひし 柳のありけ  
 舞う人も出代より居る人も  
 下りて何や侍る 引直しの程  
 九頁の程に侍る 侍 柳  
 高の木はけくさきさきりて  
 夜に雪のこぼるは 春のさめぬ  
 何とものひとりも年を越さず  
 掛はる神の移りも 何らも  
 胡坐ゆるる 大上柳を  
 笑ふも 柳の移りも 春の神子  
 吉くうらな 一かき病

機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱

晴くもく 晴くもく 晴くもく  
 所 ありとつとつ 松 磯  
 一 つま 刺し ちり ちり 園 雨  
 洗ひ 玉 草の 案の ありと  
 椽の せら 枝の ぬき 耳 遊し  
 花の ゆき ことより くるも ちり 遊し  
 春 志 せら ちり ちり 遊し

機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱 機 菱

糸子 一 つとつ ちり ちり 遊し

芥舎

○歌

天



光りて窓らへく明くは月

門へく籠らへく掃きをくへりて

構へりて掃きをくへりて

世々のなな軒にけりて生有

時々のななきこみありて雪

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

凌冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

冬

左之抄抄りておのひらきより

笑らへりて掃きをくへりて

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

外へりて掃きをくへりて

ふちくと霧のひらき二人連

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

○秋

五九

ひとりか 招き一人の直機  
 みほき 鷹のまき 古りの  
 女まき 女のまき 直機  
 形機を あてて 月うらまき け  
 家のまき 小葉島 けり  
 機まき 眼まき 直機  
 まきまき 直機 待  
 ついそまき やうまき 神の機  
 印機 終そまき 直機  
 花一本まき 直機 直機  
 人直まき まきの機

金冬 金冬 金冬 金冬 金冬 金冬 金冬 金冬

上

けき 風のまき しと 直機  
 月まき 直機 直機  
 善形まき 直機 直機  
 新まき 直機 直機  
 飛まき 直機 直機  
 虹まき 直機 直機  
 入替まき 直機 直機  
 油まき 直機 直機  
 直機 直機 直機  
 先の四五寸 直機

拈直 永機 直機 直機 直機 直機 直機 直機

○秋

本

夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...

直機直機直機直機直機直機

夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...  
 夏のあな花をさへて...  
 夏は花をさへて...

直機直機直機直機直機直機

秋

空

石のくうの形はさきほのさきの  
すまのまのまのまのまのまの

上

直機

静所

其慶

野堂

野堂

野堂

野堂

まらつたもさるね古鴨の世形り免  
斜一丁雲の流りしり月  
旅亦秋の満ちるをさるる  
わらう剃刀を研ぎてつら  
白ひまの秋の雲のりよせ  
山を占りしつらてはさるる  
こゝろの油ののちらぬ見張る

秋の寒の清とさるる  
石をさるともさるる  
まらつたもさるね古鴨の世形り免  
斜一丁雲の流りしり月  
旅亦秋の満ちるをさるる  
わらう剃刀を研ぎてつら  
白ひまの秋の雲のりよせ  
山を占りしつらてはさるる  
こゝろの油ののちらぬ見張る

野堂 野堂 野堂 野堂 野堂 野堂 野堂 野堂 野堂 野堂

○秋

全

ひるまに位時を居らぬよすの  
上座は土の見布もつらきりに  
吃りくして事と驚ふ  
買ものも何を限らばと市  
ほきき—雪のうらなりの  
張るは鼠の馳せり恒の  
粒ひの影の碎る色さし  
麻院の糸はゆるぎた青  
癖—きさききし癖  
さらりと月はまじりし  
とらるるやまらるる  
精うらよふ勢ひの神—

草 所 草 所 草 所 草 所 草 所 草 所 草 所

させぬ影アもなぬ  
かけのつらさのい  
爪まきる草花きき  
柱身くまの  
笈のふきを

草 所 草 所 草 所 草 所 草 所

石まきや出水の  
草花は  
め形は  
さくや

三芝  
袖丸  
多牙  
芝

○秋

空三

手通す 縁の 菊の 白ひの 障の 西の  
一 花の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
雇人の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
笑の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
恥辱の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
午時の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
名前の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
縁の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
まの 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
色の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
唇の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
止の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の

芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸

上

情の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
まの 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
志の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
植の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
口の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
情の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
退の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
仰の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
世の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
我の 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の  
と 白ひの 菊の 白ひの 障の 西の

芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸 芝牙丸

○秋

全

遊春の綱て月夕の夜を  
 度し住む由のまじり  
 山雀も夜を中きけぬ  
 賄方も冬をり  
 呪ふ拭ふより少ぬ  
 名を忘るる人  
 女とのはらひの  
 ちかき

丸 牙 芝 牙 丸 芝 牙 丸

名月や海流の雨は山をこら

念石

実のうへは静けりし  
 碇おろす舟を舟の垣  
 門まひりて馬のうへ  
 人おどろく信病犬の  
 木の葉を衣をうら  
 十月は春をよし種人  
 ともくとも吸るる酒  
 陰膳をねまの穂のお  
 こかきと雨はつるる  
 ちかきひさきあひま  
 秋のおもひはちかき  
 浮きのうらなぬ

石 北 石 北 石 北 石 北 石 北 石 北

○秋

空玉





冬の部

降雪は影を養うく雪の上  
勝り方小押る江の舩  
関戸各河と市のは廻高枝はく  
まごころ礎の水老らむなを  
月の芽冷たい皿と吹掃り  
枯引うけてまー竹原  
やいそぎと雄珍の返のうらた  
位牌とぬくとささくそと池を  
まのまらと女世帯を法通し

古  
空  
鷗

永機 但康 鷗 康 鷗 康 鷗 康 鷗 康

上

ふらと胸をぬる影の羽とさ  
福甚まは一まをつみまをくき  
まのまをくきまをくきまをく  
山まはままぬまをくきまをく  
ねをぬくか呼聲の鈴を奏  
つらつらと歌のまをくきまをく  
まをぬくまをくきまをくき  
霜結おぬく涼しい月とつら  
+ 畑の生ら葉は冷やあまや  
つらつらと下にくと付くまをく  
道にまをぬく馬も年よる  
解らぬつらつらとあまをく

鷗 康 鷗 康 鷗 康 鷗 康 鷗 康

○冬

空  
鷗

馬はくつらに存するもつとる  
袴のふきもそのつらに存する  
まへに膝とこゝろのふき  
まはのまへに切着てつとる  
峠にゆきかきつとる  
おろすつとる用すつとる  
新飯のつとるおろすつとる  
帯のつとるおろすつとる  
浮世をまきつとる  
後世をまきつとる  
塵のまきつとる  
胸の思ひつとる

康 機 臨 康 機 臨 康 機 臨 康 機 臨

はるを待つてつとる  
のつとる  
陽を待つてつとる

康 機 臨

居る他のつとる  
さつとる  
あけぬつとる  
つとる  
つとる  
つとる

士前 福 鶴 若 若 若

○冬 奈六

比やくとき世はひさびさよみゆて  
 とらふにけふ事一掃玉の富士  
 唐問よりかきたる壁をまきのり  
 一毎まきぬけり千星の志ひる  
 二三篇草しよ美の佳く咲き免て  
 いふ世は清く光りし月の  
 比翼紋うまきものまきし深さの  
 ろうははをりて徳を歌より  
 ちりしけり舞を新道あるを  
 くらん照らすの花の四五の  
 存解も移るとしてのまきし  
 沙干はけはあまのこま人

鶴 前 鶴 前 鶴 前 鶴 前 鶴 前 鶴 前

餅作のまきしをいふ  
 又月日はまきしをいふ  
 片やまきしをいふ  
 十夜曲のまきしをいふ  
 煙のまきしをいふ  
 袴のまきしをいふ  
 典葉のまきしをいふ  
 ほそまきしをいふ  
 白き押まのまきしをいふ  
 そまきしをいふ  
 白とまきしをいふ  
 ままきしをいふ

鶴 前 鶴 前 鶴 前 鶴 前 鶴 前

○冬

全九

か梅庵より人帯をさうりの井の下  
あはしきまきく飽ぬ水能  
権柄のはくあききまあひて  
からん陸まは二階ま地や  
ま村を年こくく花と行り  
つらまの城は皆書ひし

お新 お新 お新

湯をいへてくくく人時ふれ  
ちよつと陸まを吹し山菜花  
は又の前後の勢をきくら洲を

喰丸  
雲垂  
素山

まねしおあおのおまほり  
是は月の月と結を結ぬりの  
おあつとくくくくまへみま  
流福くす柄の美はくく向まを  
まきま中ね手家の潜りた  
はゆりままらるるのほまぬ  
問つた福らるる昔楽くくのほ  
まねままままらるるのほまぬ  
ままらるるままらるるのほり  
あつとくくくくく月く頃  
雲耕まままやうり刈ま  
ままのままの角力まままま

山垂 山垂 山垂 山垂 山垂

○冬

幸

舟より移くる小舟ゆらゆら  
其のつらつらとつらつらとつらつら  
わらわらとつらつらとつらつら  
盤のまがたつらつらとつらつら  
掃りけり埃りけりつらつら  
とつらつらとつらつらとつらつら  
松料舟身を信まつらつら  
人眼をよみ易まつらつらつら  
雪身をよみ易まつらつらつら  
灯移るとつらつらとつらつら  
持て移るとつらつらとつらつら  
所門まのつらつらとつらつら

山 垂 風 山 垂 風 山 垂 風 山 垂 風

長屋くくも冬 体もあり  
又雨より照るやらあき月の色  
あき水影より引板のようつら  
出高のつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら  
つらつらとつらつらとつらつら

山 垂 風 山 垂 風 山 垂 風 山 垂 風

○冬

幸

汲まゝの時雨をききし桶の水  
 おろしつゝとて石垣のさきへ  
 梅葉を総とちりて人のまへへ  
 移さるる色なりありしまきの日  
 蔵茶を賣るる供ふの待ねの月  
 門の程よりけりある伊  
 強河海を思ひし程より遠くふ  
 杜のまへもや笑ひしりた梨  
 とこやらと寺侍の由けりうも  
 此の縁由能かかへおるまぬ  
 二階より二階の正下へ下りし

春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲 春雲

都よりとて程のいさうける也  
 大降りと来りしやと月を雪  
 畑場へ能く移りししなる  
 中 汲とていさひ茶碗を五六ま  
 せんたい用とてあつし仕合  
 ひとくうへ花のうをうとけとえ  
 口まきとてあつし根より手  
 夕霞思ひの外は涼し 成  
 玉津 高きうか田の陰崎  
 高ひの事とて志はるく櫻あり  
 是の園をわ客は川に  
 秋止とてあつしまをて清く人

雲 春 雲 春 雲 春 雲 春 雲 春 雲 春 雲

○冬

美

秋のついでに雲の... 雲地  
仕方の多岐にわたる。相手を養うも他  
取次ぐもむじみくする。あつ  
きぬをうつす。心算の者  
七夕のまじりく丸く作る月  
松虫の雲のあつくり。鳴かせ  
さらし。の回の家あり。揚ちむ  
秋の。伊賀の。ねんまんと。あま  
まかると。ねんまんと。あま  
汗の。後をい。れ。て。返。る。法  
根を。ゆけて。押。入。難  
る。い。れ。又。休。う。ぬ。花。の。山

雲 春 雲 春 雲 春 雲 春 雲 春

抱くく。春。春。春。陽。春

春

春。く。く。く。お。御。ま。ひ。く。ま。り。村。南  
あ。ま。け。く。ま。り。の。雲。あ。ま。り。春  
く。あ。ま。の。端。地。織。あ。ま。り。下。後。て  
あ。ま。の。つ。ぬ。様。ま。ま。り。あ。ま。り  
今。ま。ま。ま。ま。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。り  
汗。ま。ま。ま。ま。ま。ま。の。ま。ま。り  
浪。掃。白。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。り  
種。移。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。り

左。岳  
朴。因  
因。岳  
因。岳  
因。岳  
因。岳

○冬

三

山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと  
 山にうもる花よりと道をも繕うと

岳、周岳因岳因岳因岳因岳

上

道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又  
 道は其谷の何れにありやらのまゝ又

岳因岳因岳因岳因岳因岳

○冬

書



樹海をたぎらんと飲み人なほし  
こころを針をらんあや板の音  
笑すもまじきあひつきの花吹雪  
あそびの音はあそびの川

因岳 因岳

返— 事は時を袖の左より  
むうひつをきく 蟻をむく軒  
端の綿油陶の結ぶ漆  
あふる相好はあひつきのあ  
そびこころと居候も月のあそび

茗好

好山 好山

別— ありあけ形を麻留  
治材の眼をきく竹端のひり  
併— ありあけ目根性  
端渡もろ人の怖る藤原約  
樹根のかりる百鬼の川 あり  
入杉の杉の松の ありあけし  
霞けぬい事くまぬいさひ  
月の雲根のさ— のまじき  
こころをいかにいかに  
あふるのまじき秋のまじき  
彼の大まじきあふるあ  
一人のまじきあふるあ

山好 山好 山好 山好 山好 山好

○冬

圭

安ひあゝ山好夕茶  
 初午の竹しつらまゝ並みあり  
 朱箱おききてそつと片まのる  
 産目を抱えぬるも御座まは  
 物珍らしくもる 信儒子  
 吉原提りてまゝもる ありまは  
 こゝこゝの鯛お刺しと珍なり  
 肴を待たぬ衆を待たぬは  
 女を待つちるる 侍土まゝ宗  
 鶴鳴るといへば 枕の位のも  
 美事なりとて 老母の茶  
 かくもまゝの月と月の 社も味を

山好山好山好山好山好山好山

中作の成りまゝ ありまは  
 鐘まてくまの 庭つとむ 甚なり  
 飯まてくまの 庭つとむ 甚なり  
 白屋のまゝ 庭つとむ 甚なり  
 ちのちを 試ま石のまゝ  
 ちのちを 試ま石のまゝ  
 ちのちを 試ま石のまゝ

好山好山好山好

安ひのまゝ ありまは  
 灰のまゝ ありまは

永櫓

う洗

船の傍白の茶點をなまほし  
けつらつらめの割る来る  
待曾と雨の空おの和順  
犬の聲をく秋を沸きま  
びんねさく松子にほろり門掃  
和者とりつと世事と当世  
山崎の見つても長い登り舟  
知るも去らぬ世を流るあ  
苦界とみ海を鏡の向を眺  
こをくれたる月の花先  
柳の流るるを柳を打て  
砂の空をゆけり息杖

機洗機洗機洗機洗機洗機

上

後ろつらつらつる嚏を唾す  
末の西の汁の空の如き  
花の赤の空の仮や屋ととせうけ  
+ 弥生餅とくは雲るひるお  
この船中一岐阜の用事を田舎  
價のよるまて結ぐおくる末  
手際よく丸形燈を張らう  
晴る日敷のうらみのさくさき  
怪子の袴すまのみのみ字  
まきく移るくぬき望の糸  
菘冬浴びひやう火を埋て  
二里の峠を二里 出をき

機洗機洗機洗機、洗機洗機

○冬

妻

三毒のハ音の物もを所を  
 去つて入り居るく留るを  
 見所て其の影を人新らき  
 河の戸場のやのばうらも  
 から掃と凡くあうるも冷や  
 つるもくくもくもくもく  
 弘より子を出世の種となふ  
 京の田舎いよひ田舎り  
 志のまを竹影の花の影  
 酒でさく申すまの所を

洗機 洗機 洗機 洗機 洗機 洗機

上

京都の如く時雨さすの暮  
 初一白きくくあきく宿  
 弘より結たきくくくく  
 くるも大女あふりし  
 暮より暑くはまの月を  
 水は清くはかろく相の  
 冷まおちぬくまおる寺  
 くるまはけける 松野の  
 打まあつくまをくくく  
 似名のまをくくく  
 竹婦人 歌まはけける

宇坪 宇坪 宇坪 宇坪 宇坪 宇坪

甚宇

涼坪

○冬

末

紫の形たゞ夕顔の月  
 打はまきそ熟田形のとらる頃  
 出船行そく飯の長中  
 重い管敷を成の華田織  
 高い場つ高い碑の建  
 とく起すそ糸の帯を帯てそる  
 密疎すそと増の管一と  
 家根土を終く扱る日の水は  
 ちちら下戸形ら羅いつふぬ  
 黒家と黒きこころは様ととら  
 弓矢まきけし佛檀のうこ  
 二年の形も埋まらんと雪終て

坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字

上

かくはる備一巨量の物ひ孫  
 若くはひのり中はよの厚丸  
 形も洞より静も守之は  
 むらさきの言の歌を道の中は  
 何そいつとと帯の物も形  
 下織のつま合の言。形のは  
 十六夕き多きとまきと利  
 手ぬひひとととく白西瓜  
 建の果少形き形室の甚よ所  
 おの和と巻つて通るとのとり  
 石布杭と折掛ふ山  
 中さう形の世の青の守る花咲て

坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字 坪字

○冬

美

春の中一形の上春の此二語

宇

鴨の鳴方よと暮る野末に  
時角の中一をとりたる舟  
さつととと茶の旨の香付移る  
こころ静しとあらば中一  
鐘歌の月は老りを海もや  
秋の月もよもよもつた  
春もよもよもつた  
新相言つてつて大入

梅后

金波

波后波后波后波后

耳をきき癖に娘の叫び  
こころよの静く二の羽を  
此の道に志すも極の極  
よの春外もよもよもつた  
さつととと涼き竹の月巻  
揺るに上ける春の貝売  
揺るをよもよもつた  
揺るよもよもつた  
揺るよもよもつた  
揺るよもよもつた  
揺るよもよもつた  
揺るよもよもつた  
揺るよもよもつた

后、波后波后波后波后

○冬

斗

後もよく心身よく結るは善光  
 山寺の鐘  
 御形事するすくも腰つらみ  
 いつともあしき初を無中  
 ぬくもりのゆるふら痛のまきま  
 向ふはまはたけもさきよを  
 何うも結まはしてまきぬ初の内  
 庭はに庭まの家法住よき  
 名あひらんだしうふらる月  
 戦うぬまもさきの勢も  
 汁の寒くは草を冬し洗つを  
 明けも急くあふぬ結 鍵

後 後 後 後 後 後 後 後 後 後

上

淨きあまのた神樂のつらしまき  
 ころもまはしる時計のつら  
 すくもつらまはるつらまの雨  
 ちあまのつらまはるつらまの山

後 後 後 後

けりつらまのつらまはるつらまの  
 幾きぬひらつらまはるつらまの  
 見え馬のつらまはるつらまの  
 ちあまのつらまはるつらまの  
 月あまのつらまはるつらまの

空 狂  
 蓮 宇  
 鶴 笠  
 宇 狂

○冬

全

昔もふ舟移り埋むる  
 秋をきききき生かしの跡もあつて  
 かつて獲りやうとまりむく  
 今もふの娘もいぬ仕人やく  
 不測とて誰かゆつて眞の言  
 及まの水伐草を浦に祀りん  
 今朝ありくとあるの影さ  
 坊もある長以月の右京柄  
 買つても市に足るる履み  
 あら建た風をききいり人をき  
 神の燈をきき潮口の棚  
 月花の遊ひの重祿の寮も

笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠

上

昔もふ舟移り埋むるの産  
 乙多の九尺万石のいそいで  
 今もふの事さう如性もの下道  
 夜縁も高い真理やあら侍  
 去つとあらつてく噂をさか  
 牙の喉へ浮川舟の歯を添て  
 あつてむつてくは露は五か  
 けつてつてくは露は五か  
 昔もふの事さう佐友兄弟  
 昔もふの事さう佐友兄弟  
 昔もふの事さう佐友兄弟  
 昔もふの事さう佐友兄弟

笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠 宇 狂 笠

○冬

全三



精もまぬさのあつる形も多し  
 以麻等の体多し、あつるを際  
 更な別るも先を多ふ、つら  
 思ひの、醫者の腹蔵は守り、了  
 主かきりて、小便を、する  
 うき、つら、あつる、は、つら、も、の、あ  
 鐘、あ、つら、し、ま、の、つら、あ

上

宇 笠 狂 宇 笠 狂 宇

俳諧目よるは、屋上の、を、終





特38

795

087404-001-7

特38-795

俳諧目に太都塵

晋 永機 編

上

M16

DBE-0747

